
脳筋な僧侶さんとあたまでっかちな勇者ちゃん

たこやん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脳筋な僧侶さんとあたまでっかちな勇者ちゃん

【Nコード】

N7371X

【作者名】

たこちゃん

【あらすじ】

修行オタクで脳筋な僧侶さんと、

理論派だが行動力が伴っていないあたまでっかちな勇者ちゃんによる魔王討伐の旅。

第00話

少女は10M以上はあろうかという石造りの城壁を背に、額に角の生えたウサギ型モンスターと対峙していた。

肉眼で確認できる距離に城下町へと繋がる門があり、門番からもこちらが見えているはずだが助けにくる気配はなかった。

額の角を突き差さんと一角ウサギは飛びかかってきたが、彼女は一刀のもとに切り伏せる。

「この程度のモンスター相手じゃ試験にならないと思うんだけど」

ブンブンと剣を振り、付いた血を落としながら青髪の少女コーデリアは愚痴る。

冒険者試験（注1）は冒険の書（注2）を手に入れるためのものであったが、今年も勇者のパートナーを募集するためのものという側面を持っている。

試験会場であるアリアハン大陸に棲息するのは最弱クラスのモンスターばかりで、魔王討伐の旅に参加できる力があるかを判断するのは難しく、兵士相手に何人抜きできるかを試験にした方が良いのではないかと彼女は考えていた。

「まあいつか。」

試験は退屈だったけど一位通過間違いなしだし、勇者様も私に注目

してくれるはず！」

腕に自信がある彼女は自分が選ばれれば問題ないだろうと納得し、花の咲いた様な可憐な笑顔で勇者が待つルイーダの酒場へと馳けていった。

第00話（後書き）

（注1）冒険者試験

以下の一連の行動をこなすことができれば、冒険者として認められ、

冒険の書が与えられ、いざないの洞窟の旅の扉の使用も許可される。
ナジミの塔最上階で盗賊のカギを受け取る

レーベで魔法の玉を受け取る

いざないの洞窟の封印を解く

例年は4人までならパーティを組んで良かったが、今年度は勇者のパートナーを募集するという目的があったため、パーティを組むことは禁止され、受験者は単独での攻略を強いられた。

（注2）冒険の書

冒険者試験合格者に与えられる名前・レベル・職業・能力値が書かれたカードの様なもの。

精霊ルビスが生み出したもので、人間にモンスターと対抗する力を持たせるために以下の機能が付けられている。

- ・冒険の書所持者がモンスターを倒した際、その数に応じて加護を与える
- ・冒険の書所持者がモンスターを倒した際、死骸がゴールドに変化する

上記の術式は世界に刻まれており、精霊ルビスが封印されている現在でも効力はある。

第01話

「いっち番乗り」

満面の笑みを浮かべながらコーデリアは酒場の扉を開いた。

「本当に早かったわねコーデリア！ まだ二日しか経ってないわよ」

カウンターの奥で黒髪の女性ルイーダが目を丸くしていた。

ナジミの塔にたどり着くまで一日、ナジミの塔攻略で一日、
レーベにたどり着くまで一日、いざないの洞窟にたどり着くまで一
日、

そしてアリアハンに帰るまで一日の合計五日間かかるのが例年の受
験者。

僅か二日間、それも一人で成し遂げたのだから、ルイーダが驚く
のも無理はない。

「この試験のために五年間も修行したんですから、これくらい朝飯
前です！

あれ？ そう言えば勇者様は来てないんですか？」

コーデリアは店内と見渡すが、自身とルイーダ以外に人影は見当
たらない。

「まだよ、普通は五日間かかるんだから。」

勇者様もあなたみたいないな規格外には対応してないわ」

目の前の修行バカにあきれ、ため息交じりにルイーダは返す。

「そっか。残念だなあ……それまで二階で休んでますから教えて下さい」

「はいはいって、ちょっと待ちなさい。一日2ゴールドよ」

ルイーダは肩を落とし、とぼとぼと階段に向かうコーデリアを呼び止めた。

「ちえ。ごまかされなかったか」

コーデリアはうまくいったと思ったのになあと、悔しそうに金貨を二枚取り出した。

「そう簡単には騙されないわよ。それにこれ。受け取り忘れてない？」

ルイーダは手のひらサイズのカードを取り出した。

「冒険の書！ 勇者様がいると思って舞い上がっていたからすっかり頭から抜け落ちてましたよ」

冒険の書を持っている人間はモンスターを倒した数に応じて世界から加護を受け、人間の限界以上に強くなることができる。さらに倒したモンスターの死骸がゴールドに変わる様になる。

人間達がモンスターに対抗できているのは冒険の書が存在しているからに他ならない。

「さつさと教会で契約を済まして来なさい。盗まれても代わりは渡さないからね」

冒険の書をただ持っているだけでは意味がない。

教会の神父、シスターだけに伝わる秘術で、

この冒険の書の持ち主は自分であると契約を結んでもらうことによつて効果を発揮する。

「何言っているんですか。私は僧侶なんだから自分でできますよ」

コーデリアは首をかしげながら言った。

「そうだったかしら。あなたが一日中剣を振っているから戦士だと思つてたわ。」

そろそろホイミくらい使える様になつた？」

ルイーダは意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「使えますよ！一回だけだけど……」

ほおを膨らませながら心外だ！と大声でコーデリアは答える。

もつとも後半は蚊の鳴くようなつぶやきだったが。

職業は教会で洗礼を受けることで決定される。

僧侶と決められたコーデリアだが、

初級回復呪文のホイミすら中々唱えられず、僧侶としては三流以下だった。

しかし、平行して行われていた剣術の修行で彼女は才を見せ、一年目にして師匠の神父の腕前を上回り、二年目以降は城の兵士に混じって鍛錬を行った。

五年経過した現在は国内に彼女以上の使い手はいないと噂される程の腕前になった。

「そう、安心したわ。ホイミすら使えない僧侶を紹介するのは勇者様に失礼だからね。」

なら早速名簿に登録するからあなたの冒険の書を見せて」

冒険の書と契約を結ぶと表には能力値が表示され、裏には使える技能が表示される。

「はい。どうぞ」

契約を済ませたコーデリアがルイーダに冒険の書を手渡す。

表

コーデリア

そうりょ

がんばりや

せいべつ：おんな

ねんれい：15

レベル：01

力：15+0

素：10+0

運：06+0

HP：25+0

MP：02+0

裏

そうりよスキル：01

ホイミ

剣スキル：58

攻撃力+30

ドラゴン斬り

メタル斬り

はやぶさ斬り

「はい、登録完了。

今はレベル1だから+の値が0だけど、レベルが上がればどんどん増えるから、

まだ一回しか唱えられないホイミももっと使える様になるわ。

それにしてもMP2は傑作ね。今まで見た僧侶の中で断然の最低値よ」

ルイーダは再び意地の悪そうな笑みを浮かべ、

熟れたリンゴの様に真っ赤になっているコーデリアに冒険の書を差し出した。

「それでは、私は二階で休憩してきますから」

コーデリアはそう早口でまくし立て、足早に階段を上った。

第02話

シングルサイズのベッドと机、イスがあるだけの簡素な部屋でコーデリアは寝息を立てている。

普段大人びた印象を与える勝ち気な瞳は閉じられており、年相応の少女のかわいらしさが感じられた。

先ほどから扉が何度もノックされているが目覚める気配はない。

鍛えているとはいえ、不眠不休でアリアハン大陸を駆けめぐる試験は、十五の少女には厳しかったのだろう。

「コーデリア入るわよ」

このままではちが明かないと判断したルイーダが扉を開け、幸せそうな顔をして眠る少女の布団を容赦なく引っぺがした。

「うっす寒い。まだ夜じゃないですか。何の用事ですかルイーダさん」

窓の外から見える月を見、コーデリアは寝ぼけ眼をこすりながら上半身を起こした。

「何の用事って、あなたが言ってたじゃない。勇者様が来たら教えてねって」

右手を額に左手を腰に当て、ため息をつきながらルイーダは言った。

「ええっ！ もう勇者様来てるんですか？ それを言ってくださいよ！」

「それもあなたを連れて行きたいと指名されたわよ」

マントを羽織り、剣を腰に差し、慌ただしく装備を調べた。

「ルイーダさん。私どこも変な所ありませんよね」

不安げな表情を浮かべルイーダに尋ねる。

「残念ながら頭が変ね。致命的よ」

ノータイムでコーデリアに返す。

「ね寝癖ですかっ！」

手鏡を取り出し確認するが寝癖は見つからず首をかしげ、ルイーダを怪訝そうに見つめる。

「違うわよ。中身の問題よ。MP2はちよつとねえ」

ニタニタしながらルイーダが答える。

「それは仕様です！ これからレベルが上がれば増えるから問題ありません！」

顔を真っ赤にしてコーデリアが反論する。

「そう。それだけ元気があれば大丈夫そうね。勇者様を紹介するか

らついでらつしゃい」

部屋を出て階段を下りるルイーダをコーデリアは駆け足で追いかけていった。

一階に降りるとカウンターで黒髪の少女が手を振っていた。顔立ちは整っているが、たれ気味の目がどこか弱気なイメージを持たせる。

「あなたがコーデリア？ 僕が勇者コレット。よろしく。凄いい剣士がいるって噂はアリアハンにいた時代に何回も耳にしたんだよ」

微笑みながらコーデリアに向けて右手を差し出してきた。

「勇者様よろしくお願いいたします。ご指名にあずかりましたコーデリアでございます。

旅の道中、立ちほだかる雑魚のお相手はお任せください。一刀のもとに切り伏せてご覧に入れましょう」

コーデリアは僧侶であるとはだれも思わない様な言葉で恭しく自己紹介する。

いつものどこか抜けた雰囲気はなく、隣で見ていたルイーダが呆然としている。

「そこまで畏まられると恥ずかしいんだけど……これからは一緒に旅をするんだから。ルイーダさんに接する時みたいにフランクな対応をしてくれないかな」

コレットはひれ伏せるコーデリアに声を掛ける。

「わかりました。ではコレットさんとお呼びします」

「さんも付けなくて良いんですけど……まあ、勇者様よりはマシか」

コレットは苦笑いしながら妥協した。

魔王バラモスにより世界が危機にさらされて以来、少年少女は魔王を倒す勇者という存在に憧れを抱いていた。

特に魔王を倒す一歩手前まで進んだ勇者オルテガを輩出したアリアンではその傾向は顕著であり、

コーデリアとてその例外ではなかったのだ。

おとぎ話に出てくる憧れの人物と旅が出来る様なものだ。

コーデリアが舞い上がってしまうのは仕方ないだろう。

「早速だけど、これからの予定について良いかな」

コホン、と咳払いをしてコレットは提案する。

「はい。私はなにをお手伝いすれば良いのでしょうか」

強力なモンスター相手に戦うのだろうか、

それとも財宝の眠るダンジョンを探索するのだろうかと、冒険を目の前にコーデリアはわくわくしていた。

「ロマリア王国の国宝金の冠がカンダタという盗賊に盗まれたんだ。それを取り返したいんだけど、盗賊団のアジトに一人で乗り込むわけにもいかなくてね。」

だからコーデリアには僕と一緒にアジトに乗り込んでもらいたい」

真剣な目をしてコーデリアに問いかける。

「ならば善は急げです。早速殴り込みましょう！」

コーデリアは立ち上がった。

コレットにさあ、早く私を連れて行ってくださいと視線を送っている。

「ちょっと落ち着いて。コーデリアは冒険の書をもらってまだレベルを上げてないよね。」

レベル上げが先決だと思っんだ」

もちろん君の剣の腕は信頼してるよと付け足し、コーデリアをなだめる。

「しかし！盗賊団が逃げたり、冠を売っ払ってしまつて大変ですよ！」

人生初の捕物に興奮し、引き下がらないコーデリアを見かねたルイーダが耳元でつぶやく。

レベルを上げればホイミがいつぱい使える様になるわよ、と。

「すみません、先走りました。時には回り道も必要ですよね」

落ち着きを取り戻したコーデリアが反省の弁を述べる。

三流以下の僧侶としてバカにされていた彼女にとって、

ホイミがいつぱい使える様になるということは魅力的だった。

「わかってもらえれば良いんだ。明日の朝出かけるから、今日はしっかり体を休めてね」

理由を知らないコレットは満足そうに頷いてコーデリアに告げる。

「ありがとうございます。それでは失礼します」

コーデリアは礼を言い階段を上った。

第03話

ソーセージの焼ける香ばしい匂いを察知し目を覚ましたコーデリアは一階の食堂へと向かう。

勇者のパートナーに選ばれたことに舞い上がっていた昨晩は何も食べておらず、とにかく食べ物を胃に詰め込みたかった。

カウンター席にコレットとルイーダを発見し、あいさつを交わし隣の席を確保すると同時にルイーダに食事の催促をする。

「おなか为空きすぎて目が覚めました。この哀れなコーデリアさんに食べ物恵んでください」

なぜか誇らしげに胸を張って言うコーデリア。

(全くこの娘は黙っていれば美人なのに、どうしてこう言動がおバカなのかしら)

ルイーダは嘆息しつつソーセージとパンを渡す。

「そつえばどこで修行するんですか？」

ソーセージとパンを水で流し込むとコーデリアは口を開いた。

「昨日言ってなかったね。まずはナジミの塔に行こうと思ってるんだ」

地下に宿屋があるナジミの塔は、食料の補給を考えずに修行ができる。

そのためレベル上げスポットとして駆け出しの冒険者に人気高い。

「もう準備はできているみたいだね。なら出発しようか」

旅人の服を纏い、頭には青のバンダナ、そして腰に剣を差している準備万端のコーディリア。

それを見たコレットは満足そうに頷き立ち上がった。

ナジミの塔へはコレットが魔法で先制攻撃を仕掛け、討ち漏らしをコーディリアが仕留めるといふ戦法で難なく到着した。

(連携は問題なし、意外に頭も悪くない)

道中の成果にコレットは評価を上方修正する。

その後も同様の戦法を続け、三日目にはレベル6にまで達した。

(もうナジミの塔は卒業ね)

一般的な冒険者のアリアハン脱出の目安がレベル6である。

この規格外の少女なら他の大陸の強いモンスター相手にも問題なく渡り合っていけるだろう。

そう思ったコレットはコーディリアに修行修了を告げる。

「やったあ！なら次はカンダタのアジトに殴り込みですよね！」

期待に目を輝かせながらコーディリアはコレットを見つめる。

「そうだよ。と言ってあげたいところだけどまだため。次はカザール村で修行。」

向こうではレベル10以下の冒険者なんてほとんどいないんだから。カンダタ達も同等かそれ以上の力を持っている。まだまだ僕たちでは力不足だよ」

コレットはカンダタの子分と戦った経験がある。

「対一ならばほぼ互角だったが、なにしろ相手は盗賊団。ほぼ確実に多対一になる。」

いくら剣の腕が立つとはいえレベル6のコーデリアが加わった程度では、

決め手不足で押し切られるのが目に見えている。

コーデリアははっきりと力不足と言われて肩を落とす。

「勘違いしないでね。僕たちはカンダタ達と比べてレベルが低いだけ。」

あつちは盗みが本職でこっちは戦闘が本職。

同等のレベルになればどちらが勝つかコーデリアにはわかるよね」

その言葉を聞いたコーデリアは拳を握りしめ顔を上げる。

そして、コレットを見つめ返しながらかこう言った。

「わかりました。私、強くなってカンダタ達に一泡ふかせてやりませう！」

「その心意気だよ。カザーブに飛ぶよ。ルーラ！」

コレットが呪文を唱えるといきなり景色が変わった。

辺りに見えるのは山、山、そして山。

そんな周りに山しかない大田舎がカザーブ村である。

「ちょっと早いけど今日はもう宿屋に行って休憩しようか」

「わかりました。でもその前に村を探索してきます」

初めてアリアハン大陸外に出たコーデリアは外の世界の村に興味津々だった。

（まあこれがストレス解消になれば良いか）
と思ったコレットは自分は宿屋で待っているからと伝えるとコーデリアと別れた。

宿屋で夕食を取っているとコーデリアが戻ってきた。

「おかえり。何か真新しい発見はあった？」

「いえ、特別変わったものは見かけませんでした。でも、おもしろい話を聞いてきました」

「へえ、どんな内容なんだい？」

「ここから北にあるノアニールという村ではエルフの怒りを買ったらしく、

呪いをかけられて村人全員が眠ったままなんだそうです。
ということで明日は北に向かいませんか？」

コーデリアはまるでおとぎ話の様な話に目を輝かせている。

「まあ修行ついでに行ってみるのもありかな。わかったよ明日はノアニールの村を目指そうか」

エルフという種族は元々人間に干渉することが少ないため、
事実である可能性は低いコレットは思っていた。

しかし、道中は修行になるし、悪いことはないと言った。
万が一本当に呪いをかけられていたらその時はその時だ。

第03話(後書き)

現時点でのステータス

コーテリア

そうりよ

がんばりや

せいべつ：おんな

ねんれい：15

レベル：06

力：15+15

素：10+4

運：06+10

HP：25+30

MP：02+5

そうりよスキル：12

ホイミ

ニフラム

ピオリム

剣スキル：58

攻撃力+30

ドラゴン斬り

メタル斬り

はやぶさ斬り

コレット

ゆうしや

あたまでっかち

せいべつ：おんな
ねんれい：17
レベル：13
力：12+20
素：10+30
運：06+09
HP：15+49
MP：20+45
魔法スキル：29
メラ
ホイミ
ヒヤド
ニフラム
ルーラ
ギラ
アストロン
イオ

第04話

「どっしょよっコレ……」

いつまで経っても目覚める気配のしない村人たちを前にコレットは頭を抱えていた。

つついても、揺さぶっても、大声を出しても結果は変わらず。今もぐっぐうと寝息を立てている。

（見なかったことにしてカザーブに帰ろう。うん、それが良い）
コレットが現実逃避を始めたころ、村内を探索していたコーデリアが戻ってきた。

「あちらの家に事情を知っているおじいさんがいました。
西の森の中にエルフの隠れ里があるそうです。そこに向かいましょ
う」

（そう簡単に見つかったら隠れ里にならないよ）
決して口には出さなかったが見つからないだろうとコレットは思っていた。

森の周辺を探索していると、唐突にコーデリアが口を開く。

「食べ物の匂いがします」

（えっ？ 匂い？ 僕には全然わからないんだけど）
困惑するコレットの手を引いて、コーデリアは獣道を進む。
しばらくすると遠目に集落の様なものが映った。

(み、見つかったよ……)

少なくとも数kmは離れた場所から食べ物の匂いを感知し、エルフの隠れ里らしきものを発見した相方の非常識さにコレットは開いた口がふさがらない。

「よし。早速突入しましょう」

絶賛混乱中のコレットの手を引いて里に入ろうとすると、長い耳を持った緑髪の女性に引き留められた。

「止まりなさい。ここは私たちエルフの里。人間が何用ですか」

エルフは嫌悪感を隠そうともせず険しい目つきで二人を見つめる。

「えっ？ えっ？ えっ？」

「なぜノアニールの村の人々に呪いをかけているのか事情を聞きたくて」

思考停止中のコレットに替わり、コーデリアが尋ねる。

「あの村の関係者ですか……その昔、娘のアンは一人の人間の男を愛してしまったのです。」

そして、ゆめみるルビーを持って男の所に行つたまま帰りません。所詮エルフと人間。アンは騙されたに決まっています。人間など見たくもありません。立ち去りなさい」

そう言うと二人に杖を向け、これ以上立ち入るなら実力行使も辞さないという態勢に入った。

「ともかく二度とこの地に来ないように。人間は嫌いです」

そう言葉を残してエルフは去った。

どうしたものかと考え込む二人に、一連のやりとりを見ていた老人が声を掛ける。

「村が眠らされたのは、わしの息子のせいなんじゃ。

あいつがエルフのお姫様と駆け落ちなんかしたから……。

息子代わって謝りに来ておるのにちっともゆるしてもらえぬ」

やはり、お姫様をお返しする他ないのかのう……と締めくくった。

「わかりました。息子さんが行きそうな場所に心当たりはありませんか？」

「探してくださるのか！ 何とお礼申し上げたら良いのか。

息子達は西にある洞窟に向かったらしいのじゃが、何分モンスターどもが強力でのう。

わし一人では奥まで行けんかった」

洞窟という言葉聞いてコーデリアの目が光る。

まだ冒険らしいことをしたことがなかった彼女にとって、未知なる洞窟への探索は魅力的だった。

「任せてください！ こう見えても私たち結構強いんですよ」

カゴぶを作りコーデリアが微笑む。

「何と頼もしい。この老骨も及ばずながら力をお貸ししますぞ。若い頃は遣り手の魔法使いとしてブイブイ言わしたもんじゃ。」

今でも後衛くらいなら務まりますぞ！」

ハツハツハと笑いながら老人は自分の杖を振り回す。

（いつの間にか洞窟に行くことになってるし。それに、僕の存在わすれてない？）

二人の世界を作っているコーデリア達を見てコレットは黄昏れていた。

「どうしたんですか？ ボーツとして。行きますよコレットさん」

（あなたのせいよ！）

心の中で元凶に罵声を浴びせた。

洞窟に入ると腐った犬の死骸という表現がぴったりのモンスター、バリイドドックの群れが襲いかかってきた。

コーデリアが近接戦闘が苦手な二人の壁となるべく単身群れの中に突っ込む。

飛びかかってくるバリイドドックを切り伏せるがいかんせん数が多い。

対処しきれず、腕や脚に噛みつかれる。

（ちよつと厳しいかもつ）

多勢に無勢。さすがのコーデリアにも焦りが浮かぶ。

「イオ！」

コレットがそう唱えると閃光を伴って爆発が起こり、バリイドドックたちが吹き飛ばす。

しかし、元は死骸。

四肢が数本損失した程度では致命傷とまではいかず、再び飛びかかるうと身を屈める。

「前を開けてくだされ！」

老人が声を上げると同時にコーディネリアは後方にジャンプして群れから離脱する。

「ベギラマ！」

老人がそう唱えると、杖の先から吹き出した炎がバリイドドックたちを包み込み、瞬く間に金貨へと変わっていった。

(僕より魔法の技量はよっぽど上じゃないか)
コレットは老人の力量に感嘆する。

「ありがとうございます。助かりました」

ぺたぺたとやくそうを傷口に張り付けながらコーディネリアは礼を述べる。

「いやいや、お嬢さんが前衛を務めてくれたからじゃよ。ワシ一人なら今頃やつらの腹の中じゃ」

魔力こそ健在だが身体能力は在りし日と比べ見る影もなく衰えている。

謙遜ではなくコーディネリアが前衛を務めなければ彼はバリイドドックの胃の中にいただろう。

「さて、治療も終わりましたし先に進みますか」

目の前には二つの階段が並んでいる。

「コーデリアはどっちが良い？」

今日一日コーデリアの勘の鋭さをイヤというほど思い知ったコレットは彼女に丸投げした。

そして、最深部にたどり着いた一行はゆめみるルビーと一通の手紙を発見した。

「お母様、先立つ不幸をお許してください。

私たちはエルフと人間。この世で許されぬ愛ならせめて天国で一緒になります…… アン」

「なんとということじゃ！ 息子が死んでいたなど……

お二方、すまないがワシを一人にしてくれぬかのう。

何、瞬間離脱呪文トキメキが使えるからワシの帰りは気にせんでええ」

何もかも遅すぎたのか。

そうつぶやいて、息子とアンが身を投げたと思われる地底湖をじっと見つめていた。

「ベギラマ！」

コレットの手から放たれた灼熱の炎がマタンゴの群れを包み込む。炎が収まった後には金貨が転がっていた。

「せいっ！」

コーデリアは遠方から魔法を唱えようとしていたバンパイアの胸元に飛び込み切り伏せる。

「ケガはない？ コーデリア」

「はい。全く問題ありません」

今までにない強敵との争いは彼女たちを大きく成長させた。行きは三人がかりでも苦戦していたモンスターももう二人の敵ではなかった。

そして、二人はゆめみるルビーと手紙をエルフの里の女王に届けた。

「なんと！ アンと男は地底の湖に身を投げたというのですか！？ おお！ 私が二人を許さなかったばかりに……」

わかりました。このめざめのこなを持って村にお戻りなさい。そして呪いを解きなさい。アンもきつとそれを願っていることですよ……」

おおアン！ ママをゆるしておくれ……」

手紙を読んだ彼女はめざめのこなをコレットたちに渡す。

「私は人間を好きになったわけではありません。さあ、おいきなさい」

そう言って彼女は里の中へと戻って行った。

「さて、これを振り撒けばとりあえずは一件落着となりますね。勇者コレットとその相棒コーデリア、エルフに呪われた民を救う。間違いなく後世に語り継がれるはずですよ！」

しかし、言葉とは裏腹にコーデリアはどこか悲しげな表情をしていた。

「そうだね。食べ物匂いでエルフの隠れ里を発見した、食いしん坊の僧侶として永遠に語り継がれるに違いないよ」

コレットは彼女の表情を見なかったことにして軽口を返す。

コーデリアが袋を開けるとめざめのこなは勝手に村内に拡散された。

そして、止まっていた村の時間が動き始める……

第04話(後書き)

現時点でのステータス

コーテリア

そうりよ

がんばりや

せいべつ：おんな

ねんれい：15

レベル：11

力：15+34

素：10+12

運：06+25

HP：25+60

MP：02+10

そうりよスキル：26

ホイミ

ニフラム

ピオリム

マヌーサ

ルカニ

ラリホー

キアリー

剣スキル：58

攻撃力+30

ドラゴン斬り

メタル斬り

はやぶさ斬り

コレット
ゆうしゃ
あたまでつかち
せいべつ：おんな
ねんれい：17
レベル：14
力：12+23
素：10+32
運：06+12
HP：15+55
MP：20+50
魔法スキル：32
メラ
ヒヤド
ギラ
ベギラマ
イオ
ホイミ
ベホイミ
ニフラム
ルーラ
アストロン

第05話

カザーブの遙か南西の海辺にそびえ立つ塔がカンダター味の根城であるシャンパーニの塔である。

コーデリアとコレットは塔から百メートルほど離れた茂みに隠れていた。

二人は金の冠を奪還するため、それぞれ作戦を考えていた。

コレット案 盗まれたものは盗み返せばいいじゃないか作戦
カンダタが外出したのを確認してから塔に潜入し、金の冠を回収。

コーデリア案 とりあえず懲らしめてから考えよう作戦
塔に突入し盗賊を全員倒す。以上。

当然作戦とは言えないコーデリア案は却下され、コレット案が採用された。

盗んだ財宝を溜め込んでいると噂されるカンダター味のアジトの塔である。

侵入者対策に罾がかなり仕掛けられているだろう。

塔内での戦闘は最低限にしたい。

ならば、最高戦力であるカンダタがいな隙に潜り込むのが最善だ。

そうコレットは判断した。

「動きがありません。今は留守なのではないでしょうか。
私は塔に侵入して偵察してきます。」

誰も居なさそうだったらあそこから手を振って知らせます」

コーディネリアはそう言って塔四階の外壁がない部分を指さした。既に様子を窺い始めて三日経った。

ちらほらとモンスターは見えるが人の出入りは全くない。

「わかったよ。危険だと思ったら即退散すること。それが条件」

同じく留守なのではという気持ちが強くなっていたコレットは彼女に許可を出した。

難なく塔の四階までたどり着いたコーディネリアはコレットへ合図を送った。

住み着いているモンスターはカザーブ周辺とそう変わらない。

それよりも強いノアニールのモンスターを相手にできる彼女達の敵ではなかった。

「待つて。話し声が聞こえる」

五階へと続く階段の途中でコレットがコーディネリアを制止する。

「二人か三人…… わかりました。殲滅して来ます」

話し声から人数を割り出したコーディネリアは剣を構えて五階へと突入した。

「へっ？」

人数次第では一度撤退して立て直すことまで考慮していたコレットは呆気にとられる。

「おいっ！ 変なやつらが来たぞっ！ おかしらに知らせに行こうっ！」

視界にコーデリアを捉えた盗賊達はそう言って階段を駆け上がっていった。

「コレットさんはここで詠唱を完了させてください。

六階に上った瞬間に魔法をぶちかましましょう！」

そう言い残すとコーデリアも階段に向かう。

（何であなたが仕切ってるの！？ 塔内での戦闘はなるべく控える様言ったよね！）

しかし、もはやコーデリアは止まらないだろう。

そう思い、指示通り呪文詠唱を終わらせたコレットもそれを追い掛ける。

六階にはパンツ一丁で覆面にマントという変質者の様な容貌の男が待ちかまえていた。

鍛えられた筋骨隆々の肉体から一筋縄ではいかない相手だろうと推測される。

周りの盗賊達の様子から察するに彼がカンダタなのであろう。

コーデリアを一瞥すると彼は口を開いた。

「良くここまで来れたな。ほめてやるぜ！」

だが、俺様を捕まえることはだれにもできん！ さらばだ！」

わっはっはという笑い声とともに彼らの姿が消える。
下からは何かが落ちた様な轟音が響く。

「しまった！ 逃げられた！ まだ遠くまでには行ってないはずですよ。追い掛けましょー」

そう言っつてコーデリアは床に空いた大穴へと身を投げた。
コレットも後を追っつて飛び降りる。

「イオ！」

背を向けて逃げるカンダタ達を視界に捉え、コレットは魔法をぶつめた。

無防備な状態で魔法をモロに食らった盗賊達は気絶してしまっつたのか起き上がる気配がない。

「おいっおまえらっ！」

クソッ！ しつこいやつらめ！ やっつけてやる！」

唯一警戒を怠っつていなかったカンダタがオノを構える。

「青髪の嬢ちゃんか前衛で、黒髪の嬢ちゃんか後衛か。

俺様の足止めが出来なければジ・エンドという訳だ。守り切れるのか？」

カンダタは品定めする様な視線を向け、からかう様な声色で言葉を投げ掛ける。

コーデリアは剣の切っ先をカンダタに向けこれが答えだと示す。

彼女はどこか騎士の様な風格を醸し出していた。

「気が変わった。女は殺さねえ主義だが手を抜いたら嬢ちゃんに失礼だな」

カンダタは覆面の奥に包まれる目を細め、オノ振り下ろす。

(速いっ！)

巨体からは想像できない高速の一撃をコーデリアは身を抜って紙一重の所で躲した。

オノが当たった床には無惨にも大穴が空いている。

(当たればミンチ確定。かなり厳しいな。でも、武器の差でリーチはこちらの方があ)

戦えない相手ではないそう結論付け、バックステップで間合いを取り息を整える。

「まだ戦意喪失しねえか。大した根性だ。

どうだ、俺様の仲間にならないか？ 命だけは助かるぜ」

「死んでもお断りよ」

「そこなくちな。さあ来い！」

軽口の応酬をしている二人だが、この間も変わらず斬撃の嵐がコーデリアに降り注いでいた。

(狙いが定まらないっ)

コレットは既に詠唱を終えていたが、二人は所狭しと動き回る。

コーデリアにも当たってしまう可能性が高く魔法を放てない。

(少しくらい休ませてくれないかな)

絶え間なく降ってくる鉄の塊を避け続けているコーデリアは、体力の限界が迫っていた。

(しまっ……)

そして、がれきの破片に躓いて転んでしまっ。

それを見たカンダタは確実に仕留めようといつもより大きく振りかぶった。

(今だっ！)

今までにない隙を出したカンダタにコレットは魔法を放つ。

「イオ！」

完全にコレットの存在を忘れていたカンダタはまともに爆発に巻き込まれる。

その際に態勢を立て直したコーデリアは呪文詠唱を始める。

「クッ。やるな嬢ちゃん。だが、二度目はないぞ！」

ダメージから立ち直ったカンダタが再びオノを構えるが、同時にコーデリアの呪文が発動し白い霧がカンダタを包む。

「マヌーサ」

「何っ！ 幻惑呪文かっ！」

「ヒャドー！」

視界が奪われ戸惑うカンダタの足下にコレットは氷結呪文をぶつ

け完全に動きを止めた。

そして、コーデリアがカンダタの首筋に剣を当て口を開く。まだやる？ と。

「ククツ。最高だ！ 安心したよ。あんた達は間違いなく勇者だぜ！」

そう言っただけカンダタは笑い出した。

先ほどまでの緊迫した空気は全く感じられない。

「なぜ僕たちが勇者だと知っているんだい？」

コレット達は一度もカンダタの前で勇者だと名乗っていない。彼女が勇者だとアリアハン大陸外で知っているのはロマリア王国の王とその側近だけである。

「簡単なことだ。王に頼まれていたからだ。

”アリアハン王国から来た勇者の少女の力を見極めろ” とな」

「ハア！？」

この発言でコレットは硬直してしまう。

「何だ？ まだ疑ってるのか？ ならこれでどうだ！」

カンダタは覆面を脱ぎ捨てるとコレットを見つめる。

「へ、兵士長……」

ロマリア王国軍兵士長の顔がそこにあった。
王に謁見した際、同席していた彼ならば彼女の顔を知っているはずだった。

「やっとわかったか」

「やれやれだ、と大げさに肩をすくめる。」

「なぜこんなことを？」

「おずおずとコレットが尋ねる。」

「アリアハン以外の国からも勇者を名乗るやつがうちの国に来ていたんだ。」

「だが、そのだれもがそう時間を置かずに消息を絶ってしまった。あまりの不甲斐なさに王様が怒ってしまったな。」

「我が国最強であるおぬしに勝てるもの以外は勇者とは認めんな。」

「ちなみにあんたが初の勇者認定だ。おめでとさん」

「そして金の冠をコレットに手渡した。」

「これは……？」

「そいつは合格証書替わりだ。それを持ってとつとと城に行け。おいっ、いつまで寝たふりしてんだ、持ち場に戻れ！」

寝転がっている部下に一喝すると、試験官も中々大変だぜと言いながら去って行った。

「急展開過ぎてついて行けません」

「気が合うね。僕も全くついて行けない」

二人は揃って疲れたとつぶやき、その場で大の字に寝転がった。

ロマリアに戻った二人は城の応接間で王に謁見していた。
そして、兵士長から受け取った金の冠を見せる。

「それは金の冠！　ということはヤツを打ち破ったのか。
試す様な真似をして悪かった。

おぬしこそ真の勇者、我が国は全力でそなたの旅を支援させてもら
うぞー！」

「ご期待に添える様、誠心誠意努めます」

「うむ。まずは北の関所を通るため、
イシスに向かい魔法のカギを取って来ると良いだろう。」

そう言って王はコレットへ書状を渡した。

「これは？」

「それにはポルトガ王にそなたらに船を渡す様に書いてある。
魔王を倒すため世界中を旅するのだ。船も必要になるだろう」

そなたらの活躍を期待しておるぞと締め、王は去って行った。

第06話

(もの凄く勘違いされている気がする……)
コレットの目の前にはダブルベッドが鎮座している。

イシスに向かう道中補給のためにアツサラームの町には立ち寄った二人は、
水と食料を買い込み、今日はここまでにして明日に備えようと宿屋の部屋を取った。

(うん。どこもおかしな点はないね)

買い出しの最中に落ち着きのないコーデリアは何度も行方不明になる。

業を煮やしたコレットは、勝手にどこかに行ってしまったわい様、手を繋いだ。

当然宿のチェックインを済ませる際も手を繋いだまま。

そついう客かと判断した宿屋の主人が気を利かした結果がコレである。

さあ寝るかと扉を開くとダブルベッドが一つ。

シングルベッド二つではなくダブルベッドが一つ。

さらに枕元にはご丁寧にこれで体を清めて下さいというメモが貼り付けられたタオルが二枚。

薬草を染みこませているので消臭効果はばっちりだ。

隣に立つコーデリアが顔を赤らめつつ口を開いた。

「まさかコレットさんにこういう趣味があったとは……
いえ私は差別などしませんとも。」

神に純潔を捧げた身ではありませんが、今回は女性同士。
ノーカンですノーカン。神も大目に見てくれるでしょう」

「違う！ 僕はノーマルだよ！ 宿屋の主人が勘違いして用意した
だけだから！」

否定するコレットに、コーデリアは良いのですよ素直になってと
暖かい視線を向けている。

あまりにも必死なその姿は逆に疑惑を深めるだけであつた。

「わかりました。今日はもう疲れましたし、早めに寝ることにしま
しょう」

そう言つてコーデリアはベッドに入った。

全裸で。

年齢が年齢だけに胸は成長途上といった所だが、きゅっと締まっ
たくびれ、
シルクの様なきめ細やかな肌が扇情的な雰囲気を醸し出している。

そして、わざとらしく寝息を立て始めた。

私は熟睡しています。これからナニかあつたとしても気が付きま
せんよと。

(これっぽっちもわかつてないよ！)

憤慨しながらコレットもベッドへ潜つていった。

(眠れない……)

先ほどの騒動から一時間は経っているが、コレットに眠気は全く訪れない。

脳内の羊さんは既に百匹は優に超えているが、
どいつもこいつもラリホーではなくザメハを唱えてくる。

そんなのはニワトリだけでケツコーケツコーコケコツコーだ。

隣のコーデリアからは規則正しい寝息が聞こえる。

どうやら寝たふりをしている内に本当に眠ってしまったらしい。

(良い匂いがする)

甘酸っぱい少女特有の香りが漂ってくる。

(寝顔は意外とかわいいな)

コーデリアの切れ長の目はどこか近寄りがたい印象を与える。中
身はアレだが。

閉じられている今は真逆の印象を受ける。

(ちょっとだけ、ちょっとだけなら……)

雰囲気流されたコレットが口づけしようとして近づくとコーデリア
と目が合った。

事態を察したコーデリアは目を閉じると再び寝息を立て始める。

(よりによってこのタイミングで目が覚めるの!?)

コレットは羞恥心のあまり悶える。

(終わった。これからは変態百合娘扱い間違いなしだよ……)

結局彼女はこの日一睡もできなかったそう。

「ヘタレですね。まあコレットさんらしいと言えばそれまでですが」
朝目覚めたコーデリアにこう言われ石化したことも彼女の名誉の
ために黙っておこう。

あれ？ まだ固まっている。ストロスの杖はどこだ。

燦々と降り注ぐ太陽光を浴びながら二人は砂漠を進んでいる。

「まったくイシスらしきものは見えません。本当にこの方向で良い
のでしょうか？」

延々と続く砂、砂、そして砂。

「大丈夫だよ。山脈を左手に真つ直ぐ歩き続ければ右手にイシスが
見えるはず」

そう言って変わり映えのない景色にくじけそうになる心へムチを
入れる。

この会話ももう何回目だろうか。

「おっ。何か居ますよ」

コーデリアが前を指さす。

「あれは…… ネコさん三匹ね。構えて」

彼女たちがネコさんと呼んでいるはキャットフライという名のモ
ンスターである。

ムササビとネコを足して割った様なかわいらしい外見だが、

魔封じの呪文マホトーンが使える強敵である。

「先制するよ。ベギラマ！」

コレットの手から放たれた炎がキャットフライ達を包み込む。

しかし、所々にやけどを負わせたものの倒すまでには至らない。

「もう一丁行きますか。バギ！」

コーデリアがそう唱えるとかまいたちが巻き起こる。

飛膜を傷つけられたキャットフライ達は地面に落ちると同時に金貨に変わった。

「今日はこの辺りで終わりにしようか」

日が傾き始めるとコレットは切り出した。

その言葉を聞いたコーデリアは聖水を振り撒いてモンスター避けの結界を張り、

テントを設置した。

砂漠は昼よりも夜の方がおそろしい。

熱を溜め込むものがない砂漠では日が沈むと同時に急速に熱が奪われていく。

氷点下を下回る極寒になることも珍しくない。

そうして砂漠を旅すること一週間。

ようやくイシスが遠目に見え始めた。

「食料も水も残り僅か。ギリギリでしたね」

「そうだね。一度たどり着けばルーラで行き来できる様になるし。ここまで厳しいのは今回で最後にしたいな」

「おや？ どうやらお出迎えの様です」

「今晚はカニ鍋かな？」

軽口を叩く二人の前に現れたのは大型のカニ型モンスターじごくのはさみ。

ただでさえ高い守備力を自身でスクルトを唱えることでさらに高めてくる強敵だ。

キャットフライとともに出てくれば、撤退を余儀なくされることも多々ある。

「ヒヤドー！」

コレットから放たれた氷の刃がじごくのはさみを貫く。弱って動きの鈍くなった所をコーデリアが止めを刺した。

「残り二匹！ もう一度ヒヤドー！」

しかし、今度は氷の刃は生み出されない。

「コレットさん。うしろにネコさんが……」

どうやら気づかぬ内にマホトーンを掛けられていたらしい。

こうなれば近接戦闘が苦手なコレットはただのお荷物に成り下がってしまつ。

「まずいつー！」

前を見るとじごくのはさみ達の体が赤い光の膜に包まれている。コーデリアの剣はやつらに通用しなくなった。

(詰んだ……)

この時二人の心は一つになった。

「うおおおおっ！」

そして二人はイシスへ向けて全力で走り出す。

花も恥じらう乙女とは思えぬ叫び声を上げながら。

「最後の最後でやられるとは。コレットさんらしい詰めの手ごたえですね！」

「うるさいよ！ コーディアのMPがもつとあればバギで今の局面を打開できたじゃないか！」

息を切らしながらお互いを罵り合う。

後から迫ってくるイヤな現実から目を逸らそうと。

しかし、現実とは得てして非情なものである。

カニさん、ネコさんに加えてイモムシさんまで追い掛けて来ている。

「ご丁寧に火の息を吐きながら。」

「増えてるっっっっっっ！」

彼女たちの追いかけてこはモンスターの群れが押し寄せて来るの
を見たイシスの兵士が、
救助に来るまで続いたのだった。

第07話

イシス王国はオアシスに寄り添う様に在る。
砂漠と違い僅かに湿気を含む風が心地良い。

コーデリア達は魔法のカギがピラミッドにあると聞きつけた。
そのため、ピラミッド立ち入りの許可を貰うため王宮へと足を運
んでいた。

「コレットさん今私に何か言いましたか？」

「僕は何も言っていないよ」

「おかしいですね。確かに誰かに呼ばれた気がしたのですが……」

あっちかな？ そう言ってコーデリア城壁の隙間に入っていった。

(また始まったよ……)

コーデリアが何かを受信してあちこちするのはいつものことであ
る。

こうなればコレットが何と言っても聞かないので好きにさせるし
かない。

どうせ厄介ごとを持ってくるんだろっなと思いつつ、肩を落とす
ながら付いていった。

通路の先にあった階段を下りると二人の前には宝箱が鎮座してい
た。

「コレットさんお宝ですよ！ ピラミッドは過去の王のお墓だと聞

きました。

きっと私たちに対する饑別です。

好意を無碍にするのは失礼なので、ありがたく頂きましょう」

「確かにその通りだけど、ここはピラミッドじゃなくてイシス城。勝手に開けると泥棒になっちゃうよ」

コレットが注意するが、コーデリアは既に宝箱を開けて中身を拝借している。

中々美しいですねと評論し、青い宝石が等間隔に四つ埋め込まれている腕輪をはめた。

それと同時に二人の目の前に骸骨が現れる。

(終わった。呪い殺される……)

コレットは自身の顔が青ざめていくのを実感した。

「私の眠りを覚ましたのはおまえたちか？」

あごの骨をカタカタ鳴らしながら骸骨が言う。

「はい。何かにここに呼び寄せられたので。

てつきりあなたがそうしたのだと思っていましたが」

何かを受信していたコーデリアは正直に説明した。

「では、その宝箱の中身を取ったのもおまえか？」

「はい。魔王討伐の旅をしている私たちへの饑別だと思い頂きました」

さも当然だと言わんばかりに胸を張って答える。

「……おまえは変なやつだな。まあいい。」

どうせもう私には用のないもの。おまえたちにくれてやるっ

そう言い残して骸骨は姿を消した。

「コレットさん何で固まっているのですか？」

隣で硬直しているコレットに話しかける。

「あなたのせいよ！ 僕は呪い殺されるかと思っただから！
ピラミッドでは絶対しないですよ！ まだ死にたくないから！」

理由がわかっていない元凶にコレットは思いをぶちまけると、
コーデリアは顔をニンマリさせて口を開く。

「へたれですねえ」

コーデリアの口撃、コレットの精神に痛恨の一撃。

「僕は慎重なだけだ！」

アツサラームの一件以来、一番気にしていた言葉を告げられ顔を
真っ赤にし反論する。

「眠れないだろうが！ 呪い殺すぞ！」

あまりのうるささに骸骨が再び現れ怒りをあらわにする。

人をたたき起こしておいてその場で口げんかとは迷惑甚だしい。

「すみませんすみませんすみません。直ちに立ち去ります！」

そう言いコレットはコーデリアの手を引いて全力で階段を駆け上がっていった。

「皆が私を褒め称える。でも、一時の美しさなど何になりましょう」

黒髪と褐色の肌のコントラストが映える美女、イシス女王がそう愚痴る。

「さて、勇者コレットはこの国へはどういった入り用で？」

「はい。ピラミッドに眠る魔法のカギを手に入れるために立ち寄りました」

「なるほど。わかりました。ピラミッドへの立ち入りを許可しましたよ」

「よ、よろしいのですか？」

あまりにもあっさりと許可を出されたコレットは聞き返してしまふ。

「魔法のカギという目的があるあなたがたなら良いでしょう。くれぐれも盗賊行為はしないようお願いいたします」

(盗賊行為を既に行っているとは口が裂けても言えない……)

「どうしました？」

「いえ。自分の目の黒い内はそのような低俗な行為を許すはずがありません」

既にバれているのかと冷や汗を流しながら答える。

顔を伏せているので表情を見られていないのは不幸中の幸いだろう。

「でしたら全く問題ありません。あなたの旅の無事を祈っていますわ」

満足そうに頷き、そう言って女王は話を締めた。

イシスの北に在る巨大な四角錐が太古のイシスの王が眠るピラミッドである。

その入り口の前に立つコレットの隣にはネコの着ぐるみ。

「それ、暑くない？」

「いえ。むしろ普段より過ごしやすいくらいです。

気温が高くなれば涼しく、低くなれば暖かくなります。

伸縮性抜群で剣を振るのに問題はありませんし、頑丈なので守備力も抜群です」

「なら良いんだけど、そのフック付ロープとツルハシ何に使ってもりなのかな？」

腰に巻き付けているふくろに何を入れるの？ 女王様の言葉覚えてる？」

コレットの額に青筋が浮かんでいるのは気のせいではないだろう。

「確か……あなたの旅の無事を祈っていますわでしたね」

しばしの間考え込んでコーデリアは思い出した様につぶやいた。

「確かにそう言ってたけど僕が聞きたいのとは違うよ！

くれぐれも盗賊行為はしないようってクギを刺されたよね！」

「ピラミッドには盗掘避けに罠が多数仕掛けられていると聞きました。た。

備えあれば憂いなしと言いますし、ふくろにはやくそうを詰め込んでいます」

私が盗賊行為などするわけがないでしょうとしれつと答える。

「絶対に畏避け以外の用途で使わないでね。僕、まだ死にたくないし」

コレットはもはや何を言っても無駄だろうと思いつつも注意した。

「大丈夫ですか？ 今引き上げますよ」

内部に入った二人だが、早速コレットが落とし穴に引っかかっていた。

コーデリアがロープを垂らし声を掛ける。

「た、助かった」

「やはり備えあれば憂いなしですね。ロープがあつて助かりました」

「素直にコーデリアの真後ろを付いて行くことにするよ」

コレットはコーデリアの超人的な勘を思い出し、ダンジョン探索はもう任せてしまおうと開き直った。

「扉を開くには、東の西から西の東へ。西の西から東の東。という順番でボタンを押さないといけないそうです。コレットさん方角わかりますか？」

明らかに人力では開かないだろう巨大な扉を目の前にしたコーデリアは尋ねる。

「入ってから北に向かって、二階では南に向かったから……正面が北だね」

「確かにそうですね。それではボタンを押しに行きますか」

そう言って先導するのはネコの着ぐるみ。

ダンジョン探索の最中だというのに全く緊張感が感じられない。

コレットは次の町で他の防具を買い与えようと固く誓う。

順番通りの押し終わると、重い何かが擦れる音が聞こえた。

「よし！ これで扉が開いたはずです。魔法のカギを回収しましょう」

（意外とモンスターも少なく楽だったな……）
あっさりと魔法のカギを入手できたコレットは拍子抜けしていた。

「それでは私は周囲に罠がないか確認してきます。
コレットさんはここで警戒しておいてください」

ふくろに魔法のカギをしまつとコーデリアは探索に出かけていった。

「特に罠はない様です。帰還しましょう」

戻ったコーデリアが報告する。
そして二人は階段へと向かって行った。

肩に手を置かれたコレットが声を上げる。

「何の用？ コーデリ……あ？」

しかし彼女は途中で何かがおかしいことに気が付いた。
腰に大きなふくろをぶら下げたコーデリアinネコの着ぐるみは前を歩いている。

ならば、自分の肩にかかっている手はだれのものなのだろうか。

「どうしましたコレットさ……ん？」

コーデリアが振り向くと通路を埋め尽くすマミーとミイラおとこの群れ。

事態を察知した二人は目を合わせ全力で走り出す。

「足止めお願い！ ニフラム！」

ニフラムとはアンデット系のモンスターを昇天させる呪文。マミーやミイラおとことは相性抜群である。ちなみに経験値とゴールドを貰えないので普段は使わない。

「お任せください！ バギ！」

コーデリアは真空呪文でマミー達を押し止める。その間にマミー達は光に包まれて消えていった。

「もう一発！ ニフラム！」

そうコレットが唱えるとミイラ男の群れも消え去った。

「ふう。何とかなった。

何であんなにモンスターが出てきたのかな？ 不思議だね。でも、僕もつと変だと思ったことがあるんだ。

どうしてコーデリアの荷物が行きと比べて膨れているんだい？」

夜叉のような形相のコレットがそこにいた。

「落とし物を拾ったのでという理由ではダメ……みたいですね。急用を思い出したので先に帰ります！」

コーデリアは言い訳をしようと思ったが、コレットから許してくれそうな気配がない。

方針変換し全速力で出口へと駆けていく。

ほしふるうでわですばやさブーストされ矢のような勢いだ。

「またお前か〜！」

取り残されたコレットの心の叫びがピラミッド内にこだました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7371x/>

脳筋な僧侶さんとあたまでっかちな勇者ちゃん

2011年10月28日16時07分発行